

短期大学における器楽教育のあり方に関する考察 —幼稚園教師に対するアンケート調査より—

生地加代

(武庫川女子大学文学部教育学科初等教育コース)

A Study of the Instrumental Music Education in a College —By an Opinionaire toward the Teacher of Kindergarten—

Kayo Ikuchi

*Department of Education, Faculty of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

The purpose of this study was to investigate the contents of instrumental music education in a college.

In 1989 kindergartens' course of study was revised, the past territory "rhythm of music" was abolished, the new territory "expression" was established.

With this change, contents of instrumental music education at training teachers should be made alterations. So, the auther seeked teachers' opinions of kindergarten as to what kind of instrumental music education was needed.

The main results were as follows: not only the basic practice of piano but also the practice of the various kinds of instruments were needed, moreover, the improvisatorial accompaniment (vamp) listening to an improvisator was necessary.

問題の所在

新しい「幼稚園教育要領」が平成元年3月に発表された。幼稚園では、平成2年度から新しい教育要領にしたがって指導が行われている。

新教育要領では、幼稚園教育が「環境を通して行うものであることを基本とする」としたうえで、重視すべき事項を三点あげている。要約すれば、

- (1) 幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- (2) 遊びを通しての指導を中心として幼稚園教育の「ねらい」を総合的に達成されるようにすること。
- (3) 幼児一人ひとりの特性に応じ発達の課題に即した指導を行うようにすること。

の三点である¹⁾

この基本に即して、5項目の目標が定められた。それにしたがって、従来の6領域から5領域に変更された。従来の領域「音楽リズム」と「絵画製作」が廃止され、その両者に代る領域として「表現」が設定された。上述した「幼稚園教育要領」の基本から考えれば、従来の領域「音楽リズム」の指導に関して、次のような反省がなされている。

これまでの「音楽リズム」の指導では、「幼児の姿を見ずに大人の文化としてある既成の音楽の形態、方法、技能を、子供たちに早く教え込むという形が多かった」。その典型が「発表会」や「鼓笛隊」であり、「自分で工

夫し想像する表現活動とは無縁の活動であり、「生活と遊離した特定の技能を身につけさせるための偏った指導」となっているといわざるをえない」のである。そこで、「子どもの喜びの表現としてまず生き生きと歌われていることが大事になる」し、さらに「自分の体を使っての音の表現、音楽の表現をしていくこと」が基本として重要になる。したがって、幼稚園教育の基本として示された「環境を通して行う教育」を進めるためには、「音楽的な面においても、教師が音楽的なセンスを持ち子どもたちにいい音や音楽を提供」できることが必要となる²⁾。

以上のように従来の領域「音楽リズム」の時代では、子どもにも技術の向上を図るという意味で、教師自身もショパンが弾けるなどの音楽的技量の高いことが要求されていた。しかし、新しい領域「表現」を指導するためには、子どもの自由なリズム的な動き、あるいは気ままに口ずさんでいる歌や音具による遊びに対応できるような音楽的なセンスや技量も要求されるはずであると思われる。

したがって、幼稚園教師を養成する大学の器楽教育においても、単に器楽の技量を高める指導だけでなく、さらに即興的な演奏、メロディーを聴いての即興的な伴奏、あるいはいろいろな楽器の練習などの指導も必要になると考えられる。

そこで本研究では、大学の器楽教育のあり方を検討する資料として、領域「表現」を指導するためには、大学でどのような器楽教育を受けておくことが必要かについて、幼稚園の教師に意見を求めることにした。

調査方法

調査対象は、本学短期大学部幼児教育専攻の卒業生で教職経験が4年未満の幼稚園教諭である。卒業後4年未満の者を選んだ理由は、大学時代の器楽教育に関する記憶がまだ鮮明と思われるからである。

調査は、平成元年の8月に郵送によるアンケート方式で実施した。回収率は54%であり、有効回答数は80名であった。なお、回答者の教職経験の平均は2.2年である。調査した時期は、平成元年3月に新しい「幼稚園教育要領」が発表され、平成2年度より実施されるため、各幼稚園では新教育要領の実施に向けて準備研究中の頃と考えられる。

調査内容は、卒業時の器楽レベルや教職経験などを尋ねる予備的質問の他、次の三つの質問からなる。質問1と2は、領域「音楽リズム」を実際に幼稚園で指導している立場から、大学時代に受講した教科器楽のあり方を尋ねるものである。質問3は、領域「音楽リズム」が新しい「幼稚園教育要領」で領域「表現」に変更されることを前提にして、現場の教師という立場から、短大における器楽教育のあり方に対する意見を求めるものである。

〈質問の内容〉

質問1では、幼稚園で実際に指導する上で、「大学時代に受講した教科器楽のどの様な内容が役に立っているか」を、以下の8項目について尋ねた。

- (1)Bg 25やC-30などの基礎的な練習
- (2)ソナチネやソナタなどの基礎的な練習
- (3)童謡の弾き歌いの練習
- (4)マーチやワルツなどの小品の練習
- (5)即興演奏の練習
- (6)移調と転調の練習
- (7)伴奏のつけ方の練習
- (8)その他

回答は、各項目ごとに「1. とっても役に立っている」「2. まあまあ役に立っている」「3. あまり役に立っていない」「4. 全然役に立っていない」「5. 習っていない」の選択肢から一つ選ぶように指示した。

質問2は、幼稚園における指導者という立場から、大学の器楽教育の望ましいあり方を尋ねる内容である。質問1の(1)から(7)と全く同じ内容の項目、および(8)として「ピアノ以外の楽器の練習」、(9)「その他」の計9項目に対して、幼稚園で実際に指導する上で、「短大の教科器楽でもっと習っておいた方が良かったと思われるか否か」を尋ねた。回答は、各項目ごとに「1. もっと習っておけばよかった」「2. 少しでも習っておけばよかった」「3. あまり習う必要はなかった」「4. 全然習う必要はなかった」の選択肢から一つ選ぶように指示した。

質問3は、新設される領域「表現」を実践する上で、「特に短大の教科器楽で十分に指導しておいた方が良い

(あるいは大切)と思われる内容」について尋ねた。尋ねた内容は、質問2と全く同じ9項目である。回答は、各項目ごとに「1. とっても大切だと思う」「2. まあまあ大切だと思う」「3. あまり大切ではないと思う」「4. 全く大切だとは思わない」の選択肢から一つ選ぶように指示した。

被験者が質問3を回答するためには、新教育要領の領域「表現」がどのような内容であるかについて、十分に理解している必要がある。そこで、十分な情報を得ていない教師のあることも考えられるので、従来の領域「音楽リズム」から領域「表現」へどう変更されるかについて筆者の整理した説明文を、質問3を回答する前に読むように求めた。説明文は資料を参照されたい。これは教育要領の改訂についての筆者の見解でもあるため、あえて全文を掲載することにした。

結果と考察

Table 1. Subjects' judgements on each content of instrumental music either useful one to guide or not (question 1) (unit:%)

	very useful	useful	useless	useless at all
(1)the practice of Bg25 or C-30	16	52	31	1
(2)the practice of Sonatine or Sonaten	12	53	34	1
(3)the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment	66	28	3	3
(4)the practice of march and waltz	43	34	22	1
(5)the practice of an improvisator performance	47	30	23	0
(6)the practice of transposition and modulation	29	32	29	10
(7)the practice of accompaniment	43	39	16	2

N=80

短大時代に受講した教科器楽が役に立っているか否かを尋ねた質問1の結果は、表1のとおりである。「とっても役に立っている」と答えた者の割合の高い項目は「(3) 童謡の弾き歌いの練習」である。一方、「(1)Bg25やC-30などの基礎的な練習」「(2)ソナチネやソナタなどの基礎的な練習」が他の項目と比べて、「とっても役に立っている」の選ばれた割合が低く、「あまり役に立っていない」の選ばれた割合が高い。幼稚園の教師にとっては、基礎的な練習よりもむしろ現場の指導に直結する内容が「役に立っている」と評価されていることは当然であろう。

次に、短大時代における器楽のレベル別に、「役に立っている」と評価する項目に違いがあるか否かを検討した。教科器楽の受講に関して、短大卒業時における器楽のレベルを、PL60時間、Bg25の者を初級、C-30、C-40の者を中級、クラマー、Bg18、その他の者を上級として分類した。このレベル別に、表1を集計し直したものが表2である。

Table 2. Subjects' judgements on each content for three leves in question 1 (unit:%)

	junior (N=10)				middle (N=50)				senior (N=12)			
	++	+	-	--	++	+	-	--	++	+	-	--
(1)the practice of Bg25 or C-30	10	50	40	0	14	56	28	2	33	42	25	0
(2)the practice of Sonatine or Sonaten	10	45	45	0	10	58	30	2	25	50	25	0
(3)the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment	89	11	0	0	66	27	2	5	67	25	8	0
(4)the practice of march and waltz	50	30	20	0	45	34	19	2	42	25	33	0
(5)the practice of an improvisator performance	29	42	29	0	53	25	22	0	40	40	20	0
(6)the practice of transposition and modulation	11	45	33	11	33	31	27	9	45	30	25	0
(7)the practice of accompaniment	33	45	22	0	49	32	16	3	36	55	9	0

++:very useful +:useful -:useless --:useless at all

この集計で特徴的な点は、初級者では、項目(3)の「童謡の弾き歌いの練習」が「とっても役に立った」と答えた者の割合が高いことである。一方、上級者では、初級者と比べると、項目(1)と(2)の基礎的な練習が「役に立っている」と答えた者の割合が高い。初級者では現場の指導に直結する内容が評価され、上級者ではむしろ応用のきく基礎練習こそ大切だという認識をもっている。器楽を上達するためには、基礎練習を完成させることが最も基本となることは言うまでもない。また、幼稚園でリズム的な指導をする場合でも、基礎練習を十分に積んでおいた方が応用がきく。特に初級者に対しては、そうした事実を教科器楽で理解させることも必要であることを、この結果は示している。

Table 3. Subjects' judgements on each content of instrumental music either necessary one to study in college or not (question 2) (unit:%)

	very useful	useful	useless	useless at all
(1)the practice of Bg25 or C-30	16	39	44	1
(2)the practice of Sonatine or Sonaten	13	50	37	0
(3)the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment	87	10	3	0
(4)the practice of march and waltz	59	29	11	1
(5)the practice of an improvisator performance	54	38	7	1
(6)the practice of transposition and modulation	42	33	20	5
(7)the practice of accompaniment	55	36	8	1
(8)the practice of instruments except the piano	65	26	6	3

N=80

表3は、教科器楽で「習っておいたほうがよかった」と思うか否かを尋ねた質問2の結果を示している。この表から、「(3)童謡の弾き歌いの練習」「(8)ピアノ以外の楽器の練習」について「もっと習っておけばよかった」の選ばれた割合が高いことがわかる。「役に立ったか否か」を尋ねた質問1でも「(3)童謡の弾き歌いの練習」の選ばれた割合が高かったことを考え合わせれば、短大における器楽の指導上で「童謡の弾き歌いの練習」は大切な内容の一つといえる。また、項目(1)と(2)の「Bg25やC-30などの基礎的な練習」については、他の項目と比べると「もっと習っておけばよかった」の選ばれた割合が低く、「あまり習う必要がなかった」と答えた者の割合が高い。これについては上級者がそう答えたことも考えられるために、器楽のレベル別に集計し直して検討することにした。

Table 4. Subjects' judgements on each content for three leves in question 2 (unit:%)

	junior(N=10)				middle(N=50)				senior(N=12)			
	++	+	-	--	++	+	-	--	++	+	-	--
(1)the practice of Bg25 or C-30	30	30	40	0	16	40	44	0	8	58	34	0
(2)the practice of Sonatine or Sonaten	10	50	40	0	15	50	35	0	8	58	34	0
(3)the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment	100	0	0	0	88	10	2	0	67	25	8	0
(4)the practice of march and waltz	70	30	0	0	64	22	12	2	33	42	25	0
(5)the practice of an improvisator performance	40	60	0	0	57	35	6	2	58	34	8	0
(6)the practice of transposition and modulation	30	40	30	0	49	27	18	6	33	50	17	0
(7)the practice of accompaniment	40	40	20	0	56	36	8	0	58	42	0	0
(8)the practice of instruments except the piano	50	20	10	20	66	26	8	0	67	33	0	0

++:very necessary +:necessary -:unnecessary --:unnecessary at all

短期大学における器楽教育のあり方に関する考察

表4からわかるように、基礎練習(項目(1)(2))を「あまり習う必要がなかった」と答えた者の割合は、レベルによらずほぼ同じ割合を示している。したがって、基礎練習については、どのレベルの者も40%ほどの者は現在に行っている教科器楽で十分であると判断している。それでは、基礎練習以外の項目で何の練習がさらに「必要」されているかについては、初級者では、「(3)童謡の弾き歌いの練習」「(4)マーチやワルツなどの小品の練習」、中級者および上級者では「(7)伴奏のつけ方の練習」「(8)ピアノ以外の楽器の練習」をさらに「習っておけばよかった」と答えている。初級者では指導に必要な最低限の技術的な練習を、上級者では幅広く指導するための応用のきくような練習をしておけばよかったと考えているのであろう。

Table 5. Subjects' judgements on each content of instrumental music either important one to guide the new territory "expression" or not (question 3) (unit:%)

	very important	important	unimportant	unimportant at all
(1)the practice of Bg25 or C-30	23	56	21	0
(2)the practice of Sonatine or Sonaten	18	56	26	0
(3)the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment	84	13	3	0
(4)the practice of march and waltz	56	33	10	1
(5)the practice of an improvisator performance	79	16	5	0
(6)the practice of transposition and modulation	46	34	15	5
(7)the practice of accompaniment	68	26	5	1
(8)the practice of instruments except the piano	58	35	7	0

N=80

次に、領域「表現」に変更されれば、短大の器楽教育でどのような指導をするべきかについて意見を求めた質問3の結果を表5に示した。領域「表現」と領域「音楽リズム」における大学の器楽教育のあり方についての意見の違いを調べるために、質問2の結果を示した表3と表5を比較することから検討する。

表3と比べて表5で、最もポジティブな選択肢(「とっても大切だと思う」)の選ばれた割合が増加していると考えられる項目は、「(3)即興演奏の練習」「(7)伴奏のつけ方の練習」である。領域「表現」を指導する上で、子どもの自由な発想を生かしてリズム表現をさせるためには、即興的な演奏の必要性、柔軟な伴奏による対応が要求されるようになると幼稚園の教師が考えていることを示している。また、項目(1)(2)の基礎練習については、「あまり大切でない」という意見が表3と比べて表5では減少しているが、これも領域「表現」で子どもの発想を生かした指導をするためには、いっそうの基礎練習の必要性を感じたからに違いない。また「童謡の弾き歌いの練習」は表3でも表5でも選ばれた割合が高く、幼稚園の教師にとって基本的に必要な技量であることがわかる。

上述した結果をさらに検討するために、(1)から(8)までの各項目ごとに、質問2(「音楽リズム」の指導上で教師に必要な内容)と質問3(「表現」の指導上で教師にとって大切と考えられる内容)の判断の変化を調べることにした。集計の結果は、表6の(1)から(8)までに示した。

Table 6. Change of evaluation about question 2 (music rhythm) and question 3 (expression) on each content. (unit:number of person)

(1) the practice of Bg25 or C-30

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	8	4	0	0
	+	8	19	3	0
	-	2	19	13	0
	-	0	0	1	0
		+:30 0:40 -:7 sign test $P < 0.01$			

(2) the practice of Sonatine of Sonaten

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	5	5	0	0
	+	8	28	3	0
	-	1	11	17	0
	-	0	0	0	0
		+:20 0:50 -:8 sign test $P < 0.05$			

(3) the practice of singing a nursery song to one own piano accompaniment

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	60	8	1	0
	+	6	2	0	0
	-	1	0	1	0
	-	0	0	0	0
		+:7 0:63 -:9			

(4) the practice of march and waltz

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	37	8	1	1
	+	7	14	2	0
	-	1	4	4	0
	-	0	0	1	0
		+:13 0:55 -:10			

(5) the practice of an improvisator performance

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	41	2	0	0
	+	20	8	2	0
	-	1	2	2	0
	-	0	1	0	0
		+:24 0:51 -:4 sign test $P < 0.01$			

(6) the practice of transposition and modulation

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	25	8	0	0
	+	8	14	4	0
	-	4	4	7	1
	-	0	0	1	3
		+:17 0:49 -:13			

(7) the practice of accompaniment

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	42	2	0	0
	+	11	16	2	0
	-	1	3	2	0
	-	0	0	0	0
		+:15 0:61 -:4 sign test $P < 0.05$			

(8) the practice of instruments except the piano

		expression			
		++	+	-	--
music rhythm	+	40	12	0	0
	+	6	11	4	0
	-	0	3	2	0
	-	0	2	0	0
		+:11 0:53 -:16			

先に表6の「(1)Bg25やC-30などの基礎的な練習」を例にして、この集計の示す内容を説明する。1行目の1列の8人は、「音楽リズム」で「とっても必要(++)」と答え、かつ「表現」でも「とっても大切(++)」と答えた者の人数である。1行目の2列の4人は、「音楽リズム」で「とっても必要(++)」と答えた12人のうち、「表現」では「まあまあ大切(+)」と判断を変えた者が4人いることを示している。欄外の+:30は、「音楽リズム」の判断からみて、「表現」でよりポジティブな選択肢を選ぶ方向に判断を変更した者(+から++に8名、-から++に2名と+に19名、--から-に1名、計30名)の人数を示している。同様に、0は判断を変更しなかった者の人数、-はネガティブな方向に判断を変更した者の人数を示す。

この(1)から(8)までの各項目について、ポジティブ(+)あるいはネガティブ(-)に意見変更した人数に違いがあるか否かを調べるために、サイン検定³⁾を試みた。その結果、有意差が項目「(1)Bg25やC-30などの基礎的な練習」($P<0.01$)、「(2)ソナチネやソナタなどの基礎的な練習」($P<0.05$)、「(5)即興演奏の練習」($P<0.01$)、「(7)伴奏のつけ方の練習」($P<0.05$)で認められた。したがって、これらの項目については、いずれも領域「音楽リズム」に比べて領域「表現」のほうがポジティブな方へ判断を変更した者の方が多いといえる。この結果は、既に表3と表5の比較で推察した結果を明確に裏付けるものである。

結 語

教育要領の改訂にともなって、大学の幼稚園の教師養成における器楽教育のあり方を検討する資料を得るために、幼稚園の教師にアンケート調査を行った。その結果、ピアノの基礎的な練習も必要であるが、今後はそれ以上に即興的な伴奏つけや童謡の弾き歌いが大切である、という意見が得られた。これは、大学の器楽教育においても取り入れていくべき内容であると考えられる。

改訂により、幼児の積極的な活動、あるいは主体的な活動を重視することがこれまで以上に強調された。したがって、幼稚園では技術的な面の指導に終始するのではなく、まず子どもと人間関係を深めるなかで風などのイメージを共有し、楽しみながら表現しあっていけるような資質が教師には要求されていく。さらに、幼児が身近な環境とどのようにかわり、そこで何を感じ、何を表現しようとしているかについて、幼児を理解できる能力と感性が教師には要求される。そして、小学校の音楽科では、幼児期に培った豊かな感性をもとにして、子どもをより創造的な表現活動へと導いていく必要がある。領域「表現」は、幼児の発達にとって豊かな感性を育てるという重要な意味をもつから、教師も個々の幼児の発達に即した個別的な指導を行っていくべきである。そのためにも、教師を養成する大学側の器楽教育も今まで通りの基礎的な練習に重点をおきながら、さらに応用練習も深め、ピアノ以外の楽器の練習なども可能な範囲でとり入れて幅広い経験を与え、身をもって音楽全般の美しさを感じられるような機会を演出する指導法の工夫が必要な時期を迎えているといえよう。

以上の結果は、教師サイドから大学の器楽教育のあり方を検討して得られたものである。しかしながら、幼児達の自由な表現活動を推進するという基本にたてば、子どもサイドからの検討も不可欠である。したがって、大学の器楽教育のあり方を検討するためには、さらに幼児の表現活動自体を何らかの方法で分析することが要求され、今後の課題である。

〈付記〉本稿の内容は既に関西音楽教育学会(平成元年10月30日)で発表したものに加筆修正したものである。

参考文献

- 1) 文部省、『幼稚園教育要領』, 大蔵省印刷局, p. 1(1989).
- 2) 森上史郎、『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, pp. 138-144(1989).
- 3) 肥田野直也、『心理教育統計学』, 培風館, pp. 101-102(1974).

資 料: 教育要領改訂についての説明文

ご承知のように、教育要領が改訂(H.1.1.15)され、来年度から新教育要領による保育が行われるようになります。そこで次に、新教育要領の実施にともなう大学における器楽教育のあり方について、お尋ねします。どのように変更されるかについて、簡単に説明しますので、以下をお読み下さい。

これまでの領域「音楽リズム」では、大きな4つの「ねらい」がありました。

1. のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。
2. のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。
3. 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。
4. 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。

今までの幼稚園などの音楽的表現活動は、幼児の姿を見ずに、大人の文化として存在する既成の音楽の形態、方法、技能などを、子ども達に教え込むという傾向が高かった。それは、高い技術がなければ音楽的表現はありえないという考えを前提として、大人から技能を指導されなければ、子どもは音楽的表現ができないと考えられてきたからです。

また、こうした領域の活動は、最終的には発表会で親に見せ、園における指導の効果を明確に示す分野として利用されてきたのではないのでしょうか。ステージなどにおける発表が最終目的になってしまい、子ども自身が自発的に活動し、表現する楽しさ、喜びを味わうということを中心にできなかったのではないのでしょうか。

新教育要領では、この領域の大きな「ねらい」が「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」とあげられているように、子どものまわりに存在する様々な音楽的なもの、造形的なものに美しいと感じるような感性をもたせることを大事にしようとしています。「ねらい」の第二は、「(2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。」とあります。これは、「様々な方法で」ということが大事であり、また「表現しようとする」という微妙な表現は、子ども自身の表現することの意志、あるいは意欲を大切にしたいという意味をもっているのです。第三は「(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」です。音楽でも造形でも、子どもの中にあるイメージは非常に重要な意味があり、その豊かさが大事ということです。さらに、それを様々な方法で表現すること自体が子どもにとって楽しく感じられなければならないことを示しています。

これまで往々にして、子ども自身の楽しさは無視され、叱咤激励されて練習をし、最後まで到達して初めてほめられるという形態がこの分野にはありました。しかし、新教育要領では、表現そのものを楽しむという姿勢が子どもの中にできあがるかどうかというところにポイントがおかれていると言えます。(以上は、大場他『幼稚園教育要領解説』フレーベル館を参照しました。)

以上のように考えますと、現行の「音楽リズム」では、「表現の喜びを味わう」ことに主眼がおかれていたのですが、どうも子ども自らが「喜びを味わう」という点では、弱かったというように評価されています。そこで新教育要領「表現」では、美しさを感じる様な「豊かな感性」を育成し、子ども自らが感じた美しさを様々な方法で表現しようとする意欲を培い、表現そのものを子ども自ら楽しむことができるような指導が要求されることとなります。その「ねらい」を達成するための教育要領での示された具体的な活動の「内容」を付け加えますと、次のとおりです。

1. 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。
2. 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
3. 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
4. 感じたこと、考えたことを音や動きなどで表現したり自由に書いたり作ったりする。
5. いろいろな素材にしたしみ、工夫して遊ぶ。
6. 音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
7. 書いたり作ったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。
8. 自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。